

令和元年8月30日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15H03184

研究課題名(和文) 六国史時代文筆活動の研究

研究課題名(英文) Study of Literary Activities in Japan of the Rikkokushi's period, the 8th and 9th centuries

研究代表者

高松 寿夫 (Takamatsu, Hisao)

早稲田大学・文学大学院・教授

研究者番号：40287933

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 8,000,000円

研究成果の概要(和文)：『日本書紀』にはじまる六国史が編纂された時代(8世紀～9世紀)、日本で漢字を用いた表現活動が、どのように展開したか、総合的に把握しようとする研究。本研究で得られた主な成果は、以下のとおりである。

(1) 『早稲田大学日本古典籍研究所年報』を期間中毎年1号ずつ刊行した。誌上において、8世紀～9世紀に渤海国との外交に際して取り交わされた外交文書の注釈、8世紀に成立した現存最古の日本漢詩集『懷風藻』の注釈の一部、関係者による論文を掲載した。(2) 『日本詩紀』『古京遺文』『寧楽遺文』等の電子データ化を行った。(3) 研究代表者・分担研究者は、様々な媒体を通じて論文の公表、研究発表や講演等の口頭報告を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

8世紀・9世紀の日本漢詩文に関する詳細な注釈的成果や、専門的な論文成果の積極的な公表によって、その理解を深化させることができた。また、『日本詩紀』等の基礎文献の電子化によって、研究者をはじめ8世紀・9世紀の日本漢詩文に関心を有する方面に、大きな便宜を提供することが可能となった。以上の成果を通じて、今後、この分野の研究の進展に寄与することができた。

研究成果の概要(英文)：It is the study to try to understand comprehensively how expression's activities using Chinese characters developed in Japan in the period while Rikkokushi (the six national histories) starting from Chronicles of Japan were compiled, in the 8th and 9th centuries. The main results from this study are as follows.

(1) We have published the annual reports of Research institute of Japanese classical books, Waseda University. We have carried the annotations on diplomatic documents exchanged with Bo Hai in the 8th and 9th centuries, and part of the annotations on Kaifuso, the existing and the oldest anthology of Chinese-style poetry in Japan compiled in the 8th century, and some papers by the related scholars or students, on the reports. (2) We have made the electronic databases of Nihon-shiki, Kokyo-Ibun, and Nara-Ibun, etc. (3) Our delegate and members have made public papers through several academic journals, and given oral reports, that is, publications of research findings, etc.

研究分野：日本文学

キーワード：懷風藻 六国史 渤海使 外交文書 日本漢文

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

8世紀から9世紀にかけて、日本におけるあらゆる記録は、漢字を用いて成された。この時期の「日本文学」研究や一般の関心の対象という点、『万葉集』『古事記』勅撰三集などが主なものだが、これらもちろん、すべてが漢字で表記されている。しかし、この時期のテキストは、いわゆる文学作品に限定されるものではなく、むしろ行政文書や仏教教学に関係するものの方が、割合的には圧倒的に多くを占めていた。しかし、とかく日本「文学」研究の対象となると、その圧倒的な割合を占めるテキスト群は、一部の「文学作品」の理解に資するための従属的な扱いしか与えられていないのが、一般的な現状である。文学研究が作品中心の傾向を有する限り、それは致し方ないことではある。しかし、この時期の人びとが、どのような背景や環境のもとで、どのように文字を駆使しつつ様々な表現を織り成していたかを考えようとするとき、大量の漢字テキストを総体的に俯瞰してみる視点が必要である。

研究代表者は上記のごとき問題意識のもとに、平成21年～23年の「平安時代初期の文筆活動と国際交流の基礎研究」(以下、研究Aとする)、続く平成24年～26年の「8世紀日本の文筆活動」(以下、研究Bとする)と、科研費による研究を続けてきた。両研究の題目に用いている「文筆」という語は、従来の「文学」研究とは異なる、漢字テキストの総体を志向する術語として用いている。そして研究A・Bの推進をとおして、この問題意識による研究の深化の必要性をいよいよ確信するに至った。研究Aでは、9世紀の国際交流に際して成った詩文を主な対象とし、研究Bでは、8世紀の漢詩文を主な対象としている。両研究によって、2世紀200年間の文筆を検討するにあたっての、いくつかの注目点が見えてきた。しかし両研究では、8世紀の後半から9世紀の前半にかけての文筆について、まだ十分な検討を加えるに至っていない。その未着手の期間の文筆の分析にも取り掛かりつつ、これまでの蓄積をも踏まえて、8世紀から9世紀の間の日本の文筆の流れを、総合的に見渡してみようというところに思い至ったのが、本研究である。200年という期間と、いわゆる文学に限定されない広範なテキストを対象とすることゆえ、個人の考察では覆いきれないものがあり、関心を共有する文学・歴史・思想史の専門家の協力も仰いだ共同研究によって、研究を展開した。この200年間の文筆をもっともよく象徴するのは、『日本書紀』(720年成立)から『三代実録』(901年成立)に至る六国史だといえよう。その時どきの意匠を凝らした行政文書の数々が網羅的に掲載され、文化動向を知るうえでももっとも重要な史料である。そのような認識によって、この約200年間を「六国史時代」と呼んでみた。

漢詩漢文の表現分析においては、典拠や用例を探し出すことが重要な作業となる。この点においては、近年、漢籍(中国で成立した古典籍)の本文の電子検索の環境が、極めて充実してきている。「四庫全書」や「中国基本古籍庫」といった膨大な電子データベース(DB)が整ったことで、かつては研究者が生涯をかけて行ってきた用例探しが、瞬く間に可能となった。本研究でも、それらの恩恵を多大に被ることとなる。一方で、日本で成立した漢詩文の総合的な電子DBの整備は、遅々としたペースでしか進行していないのが実状である。日本の文筆研究の推進にとって、電子DBの環境整備も急務である。

2. 研究の目的

六国史が順次編纂された8世紀から9世紀の日本における文筆(いわゆる文学作品に限定せず、行政文書や仏教関係のテキストも含めた書かれたものの総体)の流れを、具体的なテキストの分析を通して跡付けることを目的とする。現在はまだ充分とはいえない日本漢文の電子テキスト化を進め、そのデータベースを駆使し、歴史・思想史など関連諸分野の研究者との共同によるテキストの読解作業(語彙、踏まえる典拠、表現方法等の分析)を試み、近世期の研究者による考証の成果をも積極的に取り込みつつ、用例の実証的な分析に基づいて、約200年間の日本の文筆の位置づけと評価を行う。

3. 研究の方法

本研究で実施した事業を、簡潔に箇条書き的に列挙するならば、次のとおりであった。

- 1) 六国史時代に成立した日本の各種文献の電子テキスト化を進める。
- 2) 上記DBを駆使しつつ、特に重要と思われるテキストに対して、注釈を作成する
- 3) 『六国史時代日本漢語集成』を編集する。
- 4) 国学者手沢の諸版本への書込みを中心に、近世における六国史時代に関する文献の調査を行い、基本的な情報を把握・報告する。

以上の事柄を相互に関連させながら実現するために、早稲田大学日本古典籍研究所の組織力を活用しつつ、研究を推進する。

4. 研究成果

『日本書紀』にはじまる六国史が編纂された時代(8世紀～9世紀)、日本で漢字を用いた表現活動が、どのように展開したか、総合的に把握しようとする研究。本研究で得られた主な成果は、以下のとおりである。

- 1) 『早稲田大学日本古典籍研究所年報』を期間中毎年1号ずつ刊行した。誌上において、8世紀～9世紀に渤海国との外交に際して取り交わされた外交文書(渤海使関係文筆資料)の注釈、8世紀に成立した現存最古の日本漢詩集『懐風藻』の注釈の一部、関係者による論文を掲載し

た。注釈を施した具体的なテキストは以下のとおりである。

・渤海使関係文筆資料

- 『続日本紀』神龜5年正月甲寅条「渤海王（武藝）啓」（担当：高松寿夫）
- 同神龜5年4月壬午条「聖武天皇璽書」（担当：柳川響）
- 同天平11年2月戊辰条「渤海王（欽茂）啓」（担当：河野貴美子）
- 同天平勝宝5年6月丁丑条「孝謙天皇璽書」（担当：木下綾子）
- 同天平宝字3年2月戊戌条「淳仁天皇書」（担当：石丸純一）
- 同天平宝字3年10月辛亥条「渤海国中台省牒」（担当：城崎陽子）
- 同宝龜3年2月己卯条「光仁天皇書」（担当：田村航）
- 同宝龜8年5月癸酉条「慰勞詔書」「弔喪書」（担当：廖榮發）
- 同宝龜10年9月庚辰条「光仁天皇勅」他（担当：笹川勲）
- 延暦15年4月27日「渤海王（嵩璘）啓」他（『類聚国史』巻193）（担当：川村卓也）
- 延暦15年5月17日「桓武天皇璽書」（『類聚国史』巻193）（担当：塩村翔）
- 『日本後紀』延暦15年10月己未条「渤海王（嵩璘）啓」（担当：崔鵬偉）
- 延暦15年10月15日「群臣上表」「桓武天皇詔」（『類聚国史』巻193）（担当：高大河）
- 延暦17年5月19日「桓武天皇璽書」（『類聚国史』巻193）（担当：林宇）
- 延暦17年12月27日「渤海王（嵩璘）啓」（『類聚国史』巻193）（担当：高松寿夫）
- 『日本後紀』延暦18年4月己丑条「桓武天皇璽書」（担当：柳川響）
- 同延暦18年9月辛酉条「渤海王（嵩璘）啓」（担当：楽曲）
- 同弘仁元年9月丙寅条「渤海王（元瑜）啓」（担当：奥田唯花）

・懐風藻

- 河島皇子「山齋」（担当：井実充史）
- 大津皇子「春苑言宴」（担当：土佐朋子）
- 积智蔵「翫花鶯」（担当：荒川聡美）
- 中臣大島「山齋」（担当：顧姍姍）
- 大神高市麻呂「從駕 応詔」（担当：高橋憲子）
- 采女比良夫「春日侍宴 応詔」（担当：高松寿夫）
- 大伴旅人「初春侍宴」（担当：李満紅）
- 藤原総前「侍宴」（担当：梁奕華）

渤海使関係文筆資料は、8世紀前半から9世紀初頭にかけての外交文書に対する注釈である。従来、歴史資料としては注目されてきたテキスト群であるが、この時代の日本を含めた東アジア世界の文筆の実態をうかがわせる資料として注目し、それぞれの語や表現の背後に存在する、知の蓄積や言語習慣に思いを致しつつ、詳細な読解を試みた。注釈は、ほぼ隔月で開催してきた研究会での検討に基づくが、その研究会は現在も継続中であり、今後もしばらく、年報に注釈の連載を続けて行く予定である。

『懐風藻』には、すでに少なからぬ注釈が存在するが、作者たちがなにによって表現を創り出しているかを、なるべく具体的に跡付けるため、用例の掲出に十分な配慮を用いた。新しい『懐風藻』注釈の方向性が示せたものと考えており、今後、全注釈の刊行を目指して、注釈作業を進めて行く。

2) 『日本詩紀』『古京遺文』『寧楽遺文』等の電子データ化を行った。いずれの文献も、本研究が対象とする時代にとって重要な文献であり、かつ、いまだ電子データとしては提供されていないものである。これらの文献の電子検索が可能となれば、関係する学術研究に資するものが大きいと考えられる。現在、『日本詩紀』については、Web上でのオンライン検索を模索しており、関係機関と検討中である。

3) 研究代表者・分担研究者は、様々な媒体を通じて論文の公表、研究発表や講演等の口頭報告を行った。研究代表者の主な論文成果の概要を以下に掲示する（掲載誌等の情報は後掲〔雑誌論文〕等の項参照）。

- ・「唐僧惠雲の生物学講義 『妙法蓮華経釈文』所引「惠雲云」の言説」
鑑真とともに来朝したと考えられる唐僧・惠雲の、これまでに知られていなかった『法華経』の注釈言説を見出し、そのかなりユニークな内容について紹介した。
- ・「『日本書紀』の「孝」「孝」をめぐる歴史叙述」
『日本書紀』に現れる「孝」に関する言説を検討し、それがまず天皇の資質に関わる価値観としてあったこと、漢籍渡来以前 漢籍渡来後 非天皇言説と段階を設定して記述されていること、そして『日本書紀』編纂当時の「孝」言説とも明らかに異なる歴史段階を描こうとしていることを指摘した。
- ・「懐風藻詩の表現から文化の共有圏をうかがう 二つの「春日応詔」詩を例に」
「春日応詔」題を共有する同時代の漢詩2篇をとりあげ、同題（おそらくは同時詠）であっても異なる表現志向が認められる一方で、共通する知的状況性も確認できること、ほぼ同時代の唐の動向も敏感に受容していることを指摘した。
- ・「『続日本紀』に関わる二つの上表文から編纂者の文筆をうかがう」
『日本後紀』『類聚国史』に掲載の『続日本紀』編纂に関わる上表文2つを対象に、それらが踏まえる典拠を詳細に検討した。従来見過ごされてきた本文校訂上の問題点も指摘した。
- ・「『日本書紀』『推古天皇紀』に見える外交文書」

『日本書紀』推古天皇16年8月16日条に掲載の唐皇(隋煬帝)親書と、それに対する天皇の返書(同年9月5日条掲載)を対象に、それぞれの文書の表現類型・語彙から、いずれも実際に取り交わされた当時の書信の文面をほぼそのまま記録したものと認めてよいことを実証した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計27件)

- 吉原浩人, 錢塘湖孤山寺の元稹-白居易と平安朝の文人, 2015, 白居易研究年報, 16, pp97-125, 査読有
- 河野貴美子, 『三教指帰』および『三教指帰注集』にみる『孝経』, 2015, 東アジア比較文化研究, 14, pp29-46
- 新川登亀男, 漢字文化圏の成立 日本列島の立ち位置を考える準備, 2015, EURO-NARASIA, 3, pp31-39
- 河野貴美子, 日本文学史における『日本靈異記』の意義 その表現と存在, 2016, 上代文学, 116, pp28-45
- 河野貴美子, 「鬼」を語り記すことの意味 『弘決外典鈔』からみる『日本靈異記』の「鬼」および内典・外典, 2016, 説話文学研究, 51, pp43-53
- 河野貴美子, 幼学書・注釈書からみる古代日本の「語」「文」の形成 漢語と和語の衝突と融合, 2016, アジア遊学, 199, pp92-107
- 河野貴美子, 『日本靈異記』における『法華経』語句の利用, 2016, アジア遊学, 202, pp145-159
- 河野貴美子, 渤海との外交における文事と白居易, 2016, 中古文学, 98, pp41-52
- 高松寿夫, 唐僧惠雲の生物学講義 『妙法蓮華経釈文』所引「惠雲云」の言説, 2016, アジア遊学, 199, pp34-45
- 松本直樹, 大和王権の時空支配の構想(序論) 古事記から風土記へ, 2017, 古代研究, 50, pp44-50
- 陣野英則, 古典テクストの中の越境と交流 『篁物語』を例に, 2017, 文学・語学, 218, pp67-78
- 高松寿夫, 『日本書紀』の「孝」「孝」をめぐる歴史叙述, 2017, 国文学研究, 181, pp1-10, 査読有
- 高松寿夫, 唐僧惠雲の生物学講義・拾遺, 2017, 古代研究, 50, pp56-61
- 吉原浩人, 文殊菩薩の化現 聖徳太子片岡山飢人譚変容の背景, シリーズ日本文学の展望を開く, 2, pp112-131
- 陣野英則, 『篁物語』の構成と言葉, 国文学研究, 183, pp29-42, 査読有
- 新川登亀男, 狩谷掖斎の『上宮聖徳法王帝説證注』, 2017, 狩谷掖斎 学業と其人, pp54-60
- 新川登亀男, 文明(文字・ことば・思想)の移動 「天」概念を手掛りとして, 2017, 日本古代交流史入門, pp389-409
- 河野貴美子, 敦煌出土「新集文詞九経抄」と古代日本の金言成句集, 2017, アジア遊学, 208, pp27-41
- 河野貴美子, 『和漢朗詠集』「仏事」と 仏教文学, 2017, 東アジアの仏伝文学, pp563-573
- 河野貴美子, 奈良(南都)仏教における人的交流・文化接触, 2017, 日本古代交流史入門, pp174-190
- 高松寿夫, 懐風藻詩の表現から文化の共有圏をうかがう 二つの「春苑応詔」詩を例に, 2017, 古代文学と隣接諸学, 2, pp492-521
- 陣野英則, 聞かれる物語と書かれた物語, 2018, 中古文学, 101, 3-14
- 新川登亀男, 「車持」覚書, 2019, 早稲田大学日本古典籍研究所年報, 12, pp1-13
- 陣野英則, 『篁物語』に関する断章 「右大臣のむすめ」への求婚をめぐる, 2019, 早稲田大学日本古典籍研究所年報, 12, pp34-41
- 松本直樹, 田中頼陽『古事記新釈』(稿本)翻刻と分析, 2019, 早稲田大学日本古典籍研究所年報, 12, pp42-59
- 河野貴美子, 空海在唐時代の啓について 古代東アジア外交における文筆をめぐる一考察, 2019, 早稲田大学日本古典籍研究所年報, 12, pp14-30
- 河野貴美子, 従佚存書看中国學術文化的傳播以及漢字漢文文化圏の形成意義, 2018, 国際漢学研究通訊, 16, pp86-108

〔学会発表〕(計29件)

- 河野貴美子, 日本文学史における『日本靈異記』の意義 その表現と存在, 上代文学会秋季大会シンポジウム, 2015, 國學院大學
- 河野貴美子, 『日本靈異記』を通してみる東アジア文史哲, 2015 年東アジア古代学会, 2015, 韓国・東国大学校
- 陣野英則, 平安時代の物語文学が示す天皇と「世界」-『うつほ物語』を中心に, 国際シンポジウム「前近代における《世界》の想像», 2016, アメリカ・UCLA
- 河野貴美子, 『日本靈異記』からみる「世界」の想像, 国際シンポジウム「前近代における《世界》の想像», 2016, アメリカ・UCLA

吉原浩人, 日本平安朝漢文学における禹の形象, 第三屆「大禹与传统文化」國際學術研討會, 2016, 中国・紹興市

河野貴美子, The Formation of a Sino-Japanese Canon : Wakan Roeishu and its Legacy , Loose Canons : Value and Valuation in Japanese Engagements with Chinese Writing , 2016, アメリカ・ロサンゼルス市

河野貴美子, 渤海との外交における文事と白居易, 中古文学会大会企画シンポジウム《平安朝文学と白詩文集》, 2016, 早稲田大学

河野貴美子, Fiction and Truth : The Challenge to Kukai's Sango Shiiki , AAS-in-ASIA Conference, ASIA IN MOTION: HORIZONS OF HOPE, 2016 Kyoto, 2016, 同志社大学

河野貴美子, 東アジアにおける漢籍の伝播と共同体の構築 日本と渤海の外交における文事を例として, 渤海大学「多元視覚下亞洲共同体意識的発現与共同体的建構」系列講座(一般財団法人ワンアジア財団プロジェクト), 2016, 中国・錦州市

河野貴美子, 中国古文献在日本の伝承, 東北亞走廊研究院學術講座, 2016, 中国・錦州市

河野貴美子, Legend, Lexicon, Commentary : The Lotus Sutra in Japanese Letters , Pennsylvania State University's Department of Asian Studies, the Center for Global Studies, the Department of Comparative Literature, and the North-east Asia Council ,2016, アメリカ・ペンシルバニア州

河野貴美子, 《北京人文科学研究所所蔵書目録》中の「鈔本」研究初探, 日本漢文古写本の整理研究と中日學術交流史第二屆写本論壇, 2016, 中国・北京市

河野貴美子, Japanophone Glosses (Kunten) in Printed and Digitized Manuscripts , IMPAGINATION Forms, Media and Circulation of Writing and Publication International Conference in Comparative History of Philology, 2017, 台湾・台北市

吉原浩人, 達磨と慧思の対面 聖徳太子伝にみる達磨東漸譚の諸相, シンポジウム「南岳衡山と聖徳太子信仰」, 2017, 中国・衡陽市

松本直樹, 『日本書紀』の神話, 上代文学会夏季セミナー, 2017, 早稲田大学

河野貴美子, 『日本靈異記』における聖徳太子, シンポジウム「南岳衡山と聖徳太子信仰」, 2017, 中国・衡陽市

河野貴美子, 従存書立場所見的中国學術文化的伝播以及漢字漢文文化圈的形成意義, 北京論壇 2017 文明的和諧与共同繁荣 变化中的價值与秩序, 2017, 中国・北京市

高松寿夫, 日本上代の《边境》意識と《自然》の発見, ワークショップ「謝靈運を中心とした六朝詩と日本文学」, 2017, 中国・北京市

高松寿夫, 8 世紀日本で読まれた漢籍 『懷風藻』注釈作業をとおしてうかがえること, 中日古典ワークショップ, 2018, 早稲田大学

高松寿夫, 『日本書紀』に記された対百濟文書外交, 國際シンポジウム「古代史料に見る歴史と文学」, 2019 年, 早稲田大学

新川登龜男, 『日本書紀』の読み方 「天子」をめぐる, 中日古典ワークショップ, 2018, 早稲田大学

吉原浩人, 白居易と平安朝漢文学 文人貴族の受容の諸相, 湖南大学外国語学院學術講座, 2018, 中国・長沙市

吉原浩人, 唐代最後の訳経『大乘本生心地観經』と日本留学僧靈山三蔵をめぐる物語, 寧波大学「李達三講堂」第 44, 2018 年, 中国・寧波市

吉原浩人, 敦煌莫高窟第 420 窟「法華経變」の靈鷲山と日本の靈鷲山図, 國際會議「北方系網之路文化遺産与 21 世紀」, 2018, 中国

陣野英則, 日本古典文学における「身」と「心」 『古今集』と『篁物語』の場合, 國際シンポジウム「東北アジア人文学の新傾向」, 2018 年, 韓国・ソウル市

松本直樹, 神話 が作る国家 列島古代の精神史, 全国大学国語国文学会大会, 2018, 明治大学

河野貴美子, 日本古代の仏典注釈書を通してみる中国古辞書の利用とその意義, 國際シンポジウム「古辞書研究の射程」, 2018, 国立国語研究所

河野貴美子, 「文」と「文学」: 『日本「文」学史』的嘗試, 北京大学“東方大文学”系列講座 第七講, 2018, 中国・北京市

河野貴美子, 経書写本在日本の流伝、利用及文献価値, 北京大学中国古文献研究中心系列學術講演(第八十九講), 2018, 中国・北京市

〔図書〕(計 14 件)

小山利彦・川添房江・陣野英則編, 王朝文学と東ユーラシア文化, 武蔵野書院, 2015, 全 466 頁

河野貴美子・Wiebke DENECKE・新川登龜男・陣野英則編, 日本「文」学史 第一冊 「文」の環境 「文学」以前, 勉誠出版, 2015, 全 530 頁

松本直樹, 神話で読みとく古代日本 古事記・日本書紀・風土記, 筑摩書房, 2016, 全 285 頁

河野貴美子・王勇編, アジア遊学 衝突と融合の東アジア, 勉誠出版, 2016, 全 199 頁

東野治之・新川登龜男他, 法隆寺献納宝物特別調査概報 古今目録抄 3, 東京国立博物館, 2017, 全 135 頁

陣野英則・土方洋一編，日本文学研究ジャーナル 第3号，古典ライブラリー，2017，全111頁

河野貴美子・Wiebke DENECKE・新川登亀男・陣野英則編，日本「文」学史 第二冊「文」と人びと，勉誠出版，2017，全561頁

東野治之・新川登亀男他，法隆寺献納宝物特別調査概報 古今目録抄4，東京国立博物館，2018，全136頁

新川登亀男編，日本古代史の方法と意義，勉誠出版，2018，全852頁

阿部泰郎・吉原浩人編，南岳衡山と聖徳太子信仰，勉誠出版，2018，全352頁

早稲田大学日本古典籍研究所年報，第9～12号，全114頁・全144頁・全168頁・全160頁

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：河野貴美子

ローマ字氏名：KOUNO KIMIKO

所属研究機関名：早稲田大学

部局名：文学学術院

職名：教授

研究者番号（8桁）：20386569

研究分担者氏名：陣野英則

ローマ字氏名：JINNO HIDENORI

所属研究機関名：早稲田大学

部局名：文学学術院

職名：教授

研究者番号（8桁）：40339627

研究分担者氏名：新川登亀男

ローマ字氏名：SHINKAWA TOKIO

所属研究機関名：早稲田大学

部局名：

職名：名誉教授

研究者番号（8桁）：50094066

研究分担者氏名：松本直樹

ローマ字氏名：MATSUMOTO NAOKI

所属研究機関名：早稲田大学

部局名：教育・総合科学学術院

職名：教授

研究者番号（8桁）：50239109

研究分担者氏名：吉原浩人

ローマ字氏名：YOSHIHARA HIROTO

所属研究機関名：早稲田大学

部局名：文学学術院

職名：教授

研究者番号（8桁）：80230796

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。